

---

# 鳥人 -とりじん-

猫田犬次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鳥人 -とりじん-

### 【NZコード】

N6358M

### 【作者名】

猫田犬次郎

### 【あらすじ】

鳥人、まさかの小説化！ ある日突然現れた鳥人！ その日から始まる共同生活！ 笑い飯の漫才が原作の掛け合い漫才的ギャグ小説！ アルカディアにも投下しました。

## 第一話「鳥人現る」（前書き）

笑い飯のあれです。なので一応一次創作ということにしました。  
ヤグ漫画的な小説を目指します。

## 第一話「鳥人現る」

僕は夏祭りが好きだ。夜店が並ぶ通りを何を買ひでもなく歩く、それだけで楽しいのだ。

毎年僕はお父さんに連れられてやつてくる。それは誕生日のようには必ず一年に一回ある大切なイベントで、今日がその日だ。もう六年生だし親と歩くのは少し恥ずかしいが、今日だけは特別。

普段はただのひらけた何も無い土地なのに、この日だけは屋台がところ狭しと並んでいる。どこの屋台も赤や黄色ばかり使ったお祭り色。近づいてみれば、焼きそばやたこ焼き、フランクフルトなんかの油っぽい匂い、ソースの焦げる匂い、あちこちから聞こえるジュージューと焼ける音、それらが僕を過剰なほどに包んでいった。夏祭りというのは実に隙がない。訪れた人の五感全てで祭りを感じさせ、気分を高揚させる。先ほどまでワクワクとした気分だった僕は、一瞬にしてウキウキとした気分になつた。

女の子たちは浴衣を着ていて、すれ違ひざまに揺れる袖が僕の腕をそつとなでてゆく。飴を舐める子とすれ違つて、ほのかに甘い匂いがした。

そうだ、まず考えなきやいけないのはすぐこの屋台でりんご飴を買うか、それとも向かいであんず飴を買うかだ。その手前のチョコバナナや向こうのわた飴が論外なのは言うまでもない。

やつぱり男はあんず飴だ。根拠はない。そう思うとりんご飴のほうが女の子っぽい気がしてきたし、やつぱりあんず飴だ。

僕はお父さんに渡された小銭入れを握り締め、あんず飴の屋台へ駆け寄つた。

「一つちょうだい

「はいよ、一百円ね

高い。高すぎる。デフレ不況を微塵も感じさせない値段だ。でも買ひちゃう。祭りのときは仕方ないのだ。売り物は大したことはな

いが、祭りの売り物には不思議な力がある。きっと祭りの精神が込められているのだ。だから買つほどに気分が高揚してしまつ。それならば値段が高いのも納得だ。でもちょっとお父さんに悪い気もする。

僕は飴を舐めながらそんなことを考えて通りを進んだ。このまま何もしなくてもきっと楽しいが、僕は次の目的地を探した。お腹が空いていたので大体気になるのは食べ物屋だったが、「ひよこ」の文字が目に入ると迷わずそちらへ向かった。

僕は動物が好きだった。僕の家は一軒家なのにお父さんはペットを飼うことを許してくれず、そのせいにより一層動物に憧れていた。ひよこは黄色くてふわふわしていて、とても可愛かつた。

「うちじや飼えないぞ」

「わかつてゐるよ。見てるだけ」

「じゃあちよつとお父さんトイレ行つてくるから、ここで待つてなさい」

お父さんはそう言って人ごみの中に消えていった。  
欲しい。飼いたい。でもどうやって育てるんだろ。わかんないや。それにお父さん絶対に許してくれないだろうな。だけど可愛いなあ。今のうちに買っちゃおうかな。でもさすがにそれは怒られちゃうよなあ。

僕は駄目なものは駄目とちゃんとわかつっていた。しかし諦めきれなかつた。

すると後ろから声がした。

「君は本当に鳥が好きなんだね」

「はい、動物が大好きなんです」

振り向くとそこには英國紳士風の、鳥がいた。首から下はタキシードを着た上品な男だが、頭はまさしく鳥で、たぶん白い二ワトリだ。白目の見えない切れ長の目が不気味だった。

「やあ、私は鳥人だよ。人間の体に鳥の頭、鳥人さ」  
要は化け物だ。

「お父さん！　お父さあああん！」

「呼んだつて来やしないよ」

僕は戦慄した。この化け物はお父さんに何をしたのだろうか。

「お父さんは来ない……大便中だからね！　さつきトイレで会ったんだ」

「ああ……なんだ」

案外普通の理由だつた。

僕は恐る恐る聞いてみた。

「……あんた何者だ」

「だから私は鳥人さ。鳥好きの子供にしか見えない、鳥人さ」

「とりじん？　ちょうどじんじゃないの？」

「ふむ、初心者にはよくある間違いだね。鳥人と鳥人は全然違うんだ。君は空を飛びたいかい？」

「え？　そりゃあ、まあ」

「それならば！」

そう言つて鳥人は僕の体を持ち上げ、思い切り踏ん張つて跳んだ。が、すぐに着地した。

「ほら飛べないだろう！　鳥人なら飛べるけどね。鳥人は首から上ちよづじんしか鳥じやないからね、はは！」

鳥人は甲高い声で笑つた。訳のわからない状況だが危険ではなさそうだと思った。

「じゃあ鳥人は何が出来るの？」

「このくちばしを見たまえ。ほら、焼き鳥を真ん中からでも食えるのさ！」

鳥人はねぎまをどこからか取り出し、串の真ん中にある肉を素早く食べた。あまりのくだらなさに僕は苛立ち始めた。

「鳥肉おいしいな」

彼はねぎまの鳥肉だけを全て食べた。

「共食いじゃんか！」

「確かにそうかもしれない。しかし、考えてみたまえ。他人から金

を奪い合つ、この資本主義こそが眞の共食いでないかね

「いらないよそんな社会風刺！」

「じゃあ君には」の残つたねぎをあげよ！」

「こりなつて！ 自分で食べなよ…」

「ねぎは嫌いなのさ」

「じゃあ何でねぎま買つたの…」

「君のためだよ」

「なら普通の焼き鳥くれよ…」

「いや、私とて鳥の端くれだ。そんなことは出来ない」

「さつき鳥肉食つてたろ…」

「気のせいだね、それは」

「気のせいって…」

僕はもうすっかり呆れてしまつた。鳥人はとこうと蝶ネクタイを緩め始めていた。

「まあまあ、そんな」とよりも鳥の頭と人の体の境目の部分でも見て落ち着きたまえ

「気持ち悪いよ！ そんなんで落ち着くか！」

「おやおや境目だよ？ お待ちかねの」

「待つてない！」

「そうか、喜んでもらえると思つたんだが……お、それだ忘れていた。私はこういう者なんだ」

鳥人は胸の内ポケットから名刺を取り出した。そこには「鳥光」と書かれていた。

「とりみつさん？」

「いや、『とり ひかる』だ」

名前なんかより正体を知りたくて肩書きのほうを見てみたが、ひどく汚れていて読めなかつた。顔を近づけてよく見ようとしたら焼き鳥のたれの匂いがした。わかつたのは結局、さつきのねぎまも内ポケットから取り出したということだけだった。

「あんず飴おいしいな」

「いつの間に！」

僕が持っていたはずのあんず飴を鳥人は細長い舌で舐めていた。

「なるほど、君の事は大体わかつたよ」

「え、なんで？」

「飴に付着した唾液から君のDNAを解析したのさ」

「怖いって！ でもDNAなんか知つても意味ないでしょ」

「それはどうかな」

「え？」

鳥人は十分に間を置いてから言った。

「君は自分がお父さんの本当の子供だなんて思つていいのかい？」

「それってまさか……」

「DNAを比較すればわかつてしまふんだ。君のお父さんと君の血  
が繋がつているかどうか」

僕は何も言えなかつた。

「まあ……お父さんのDNAは知らないけどね」

「やっぱ意味ないじゃん！」

僕は祭りに来たばかりだといつのに、無害だが気に障るこの化け物と喋つていて非常に疲れてしまった。やたらと絡んでくる鳥人をどうにかして振り切ろうと考えていたところ、遠くにお父さんらしき人影が見えた。こちらへ向かっているようだつた。

「君のお父さんが來たようだね」

鳥人に気づかれてしまつた。

「だからもう鳥光さんは帰つてよ」

「『とりひかる』だ」

「どっちでもいいよ」

「いやいや名前は重要だよ。鳥人界隈では特にね。そもそも鳥人の社会というのは……」

「興味ないよそんな話！ もう他の子供のところへ行つてよ」

「そういう訳にはいかないね」

「お父さんも來たし追い払つてもらうから」

「君はあれがお父さんだという確信はあるのかね？」

「DNAの話はもういいって！」

「やうじやないさ。あのお父さんは本当に人間だろ？つか？」

「まさか……」

こんな化け物だ、お父さんに何かしたのかもしね。僕は急に血の気が引いていくよに感じた。

「父親という人間の皮を被つているが……結局は企業の働き蟻さ」

「また社会風刺かよ！」

そうだった、鳥人の言葉を真に受けた僕が馬鹿だった。何なんだろ、このくだらない化け物。

僕はようやくやつて来たお父さんに助けを求めた。

「お父さん！ 变な鳥が話しかけてくるよ！」

「馬鹿！ 失礼なことを言うんじゃない！ あれはお父さんの会社の同僚、鳥さんだ」

「ええ！」

「この鳥人が会社員だつて！？ にわかには信じ難い話だ。

「あれ？ 鳥好きの子供にしか見えないんじゃなかつたつけ？」

「ふむ。人間の本質というのは結局のところ、鳥好きの子供なのさ

「うん、よくわかんないけど嘘なんだね」

「おいおい鳥さんになんて言い方をするんだ。これから一緒に暮らすんだから失礼のないようにしなさい」

「ん？」

何かとんでもない」とを言われた気がする。

「あれ、鳥さんまだ言つてなかつたんですか？」

「いや悪い悪い、そういうえば言い忘れていたよ」

「そうですか。鳥さんはなあ、訳あって今日からひりひりでしばしばへりへり暮らすことになつたんだ

「なんだつて！？」

「お前の隣の部屋空いてるだろ？ そこを鳥さんの部屋にしようつと思つてゐる

えええええ！？

「という訳で、よろしく」

ああ何ということだろつ。僕は今日からこの不可思議で不愉快な化け物と暮らす羽目になってしまったのだ。祭りはその後、僕とお父さんに鳥人が加わつて回り、しかも鳥人が一番はしゃぎ、僕はちつとも面白くなかった。当然帰り道にも鳥人は付いてきて、うちにやつて來た。

ああ何だこれは。僕の夏祭りの美しい記憶は鳥人によつて強引に上書きされ、消え去つた。もはや夏祭りと言えば悪夢の始まり、それ以外に言葉が見つからない。

そう、これは始まりなのだ。このときの僕は平凡だが幸せな日々が、この日を境に異常な日々へと変貌するとは思つてもみなかつた……いや、大体予想してたな。だつて鳥人との共同生活だもの。まともな日々になる訳がない。そもそも鳥人つて何だよ、鳥人つて。

## 第一話「鳥人現る」（後書き）

<次回予告>  
明かされる鳥人の謎！  
次回「鳥人の秘密」  
乞うご期待！！

## 第一話「鳥人の秘密」

ああ、眠れない。

もう夜中だというのに、僕は眠れずにいた。そりやそうだ、鳥人とかいう化け物が現れたんだもの。しかも、今も隣の部屋にいる。これが夢だつたらどんなにいいか。そう思つてもまだ眠れもしないんだから、これ、現実っぽい。

明日は日曜だから早起きしなくていいのが幸いだ。

僕はそうして鳥人に悩まされながらも、深夜五時ごろになつてようやくまどろみ始めた。

その時だった。

「…………コッ…………コッ…………コケコッコオオオオオオオオオオオオオオ！」

「つるさつー！」

僕は思わず布団を跳ね上げ、起き上がつてしまつた。

「何なんだよ一体！」

とはいゝ、目が覚めて冷静になつてみると全ては明らかだつた。

そう、鳥人だ。こんなことをするには絶対に鳥人だ。

僕は一階にある自分の部屋を出て、一階のリビングに降りていつた。

そこには「一ヒーを飲むお父さんの姿があつた。

「おう康介、おはよう。随分と早起きじゃないか

「…………ああ、まあ、鳴き声に起こされたからね

「はつはつは、鳥さんがうちに来れば目覚ましはいらないな

「やっぱりあの人の鳴き声だつたんだ。で、鳥さんは？」

「まだ寝てるよ

「え？」

「鳥さんは毎朝五時ごろになると寝言をつぶやくんだ

最低だ！ 人を早朝に起こしておいて自分だけ寝てるなんて！

ていうか寝言つてレベルじゃないぞ！

「お父さん。あのさ、もう一回寝ていい？ 昨日眠れなくてさ」

「おう日曜だしゆつくり寝とけ」

僕は部屋へ戻り、そこでようやくの休息を得た。

僕が起きたのは昼になつてからだつた。起き上がりつてみると、そこには英國紳士風の、鳥がいた。だから昨日の出来事は夢だつたのだろうか、なんていう定番の幻想すら抱くことが出来なかつた。

「やあ、やつとお目覚めかい？ 康一くん」

「康介ですけど」

「おつと失礼。さつき起きたばかりでまだ寝ボケているようだ」「どうして朝五時に鳴いといて自分は起きないのさ」

「私は夜行性なんだ」

「二つトリなのに？」

「ああ、毎晩2ちゃんねるの鳥人スレばかり見ていてすっかり昼夜逆転さ」

駄目だこの人。

「そうそう、君は起きてからまだ何も食べてないだろうから食べ物を持つてきたんだ。一緒に食べようじゃないか」

なんだ、意外と気遣いが出来るじゃないか、鳥人。

「はいこれ」

鳥人は僕に小袋を渡した。感触から何かやわらかいお菓子だと思つた。

「グミ？」

「まあそんなところかな」

僕は透明なビニールの部分から中をのぞいてみた。

「つてこれミニズじyan！」

「お気に入らないのかい？」

「当たり前だよ！ 僕は鳥じゃないんだし！」

「こりや残念。君が好きそうな餌を釣具店で買ってきただが」

「いや餌の時点で間違ってるよー。餌つて何だよ餌つて」

「さて、おかき食べよつと」

「自分は////ズじやないのかよ！」

「そんな気持ち悪いもの食える訳ないだりつ」

「じゃあなんで食わすんだよ！」

「試したのさ、君の可能性つてやつを」

「かつこつけて言つてるけど、興味本位のイタズラだよそれー」

「ああ、何だよこのくだらない化け物。

「おや、気分を害しているようだね。なんのせいかわからないが」「あんたのせいだ。

「私は鳥好きの子供が元気でない姿を見るのが嫌でね。そうだ、君にインコをあげよつ」

「ほんとにー?」

「ああ本当だ」

「あつ……でもお父さんが飼つちや駄目つて言つから無理だよ」

「大丈夫、お父さんには見えない特別なインコや」

確かに鳥人ならそんなインコを用意することも出来そうだと僕は思つた。鳥人はタキシードの内ポケット探つっていた。

「はい、これがそのインコだよ」

「鳥さんありがとう」

「君にも見えないから氣をつくるんだよ」

「それじゃほんんど意味ないよー」

「私にはほんやりと見えるんだよ」

「あんたはちゃんと見えとけよー」

「はは、それは流石に冗談さ。私も全然見えないんだ」

「じゃあ何の意味もないよそのインコー」

「まあペットというより概念だね、『インコ』といづ。『インコ』つて知つてるかい？」

「どう考へても知つてる流れだつたでしょー。ていうか实物をくれるんぢやないの？」

「実物？ いるじゃないか。君の心中に」

「だから概念じゃなくて……」

「無駄だ。鳥人と眞面目に話した僕が馬鹿だった。

「……はあ。鳥人つて一体何なのさ」

「私も昔はこんな醜い姿じやなかつたんだがね……」

「えつ、そうなの？」

「これは罰なのさ」

「罰？」

「こんな姿にされたんだから、この人はきっと深刻な過去を抱えているのだろう。聞くべきじやなかつたのかもしね。僕は軽率だつた。

「そうだ罰なんだ。でも君にはまだよくわからないだろうね」

「なんだろう。大切な人のために神様に背いたとかそういうのかな。「君はまだ知らないだろう。酒の席での罰ゲームは意外とエグイことになるつてことを」

「そんなことで鳥人にされたの！？」

「ああ。酒の席は恐ろしいのさ」

「いやむしろ罰ゲーム程度で鳥さんの姿を変えた人が恐ろしいよ！何その能力！？ つていうかやつたの誰！？」

「せんとくんだ」

「せんとくん！？ あのせんとくん？」

「そうだ。その日、私は合コンに行つたんだ。男女三人ずつで、女の子は三人ともかわいい子で最高だつた。男の方もレベルが高く、私とせんとくん、そして奈良県立歴史民族博物館の機械人形だつた「ひどいメンツ！ レベル高すぎるよ…」

「結果はというと……惨敗だつた」

「だらうね！ あ、でもその頃の鳥さんは普通だつたんでしょ？」

「ああ。その頃の私は長身ですらりとした美形の、二ワトリだつた」

「ええ！？ 変えられたの首から下かよ！」

「で、合コンの後は男三人でヤケ酒さ。飲みすぎてはつきりとは覚

えてないが、たぶんその時の罰ゲームか何かでせんとくんあたりに首から下を人間に変えられてしまつたんじゃないかな」

「あやふや！ 一番大事なとこあやふやだよ…」

何だかくだらないのに壮絶な出来事だ。もつ何と言つたらいいのかわからぬ。

「ま、君もいすれ似たような経験をする年になるから、気をつけるんだよ」

絶対経験しないでしょそんなの。それにどう<sup>どう</sup>氣をつければいいんだ。

「そんな暗い話より、そろそろ口ボット<sup>ちゅう</sup>鳥が来るはずなんだが……」  
すると突然、窓ガラスを突き破つて何かが部屋に入つてきた。粉々になつたガラスが部屋中に飛び散り、僕はとっさに目をつぶつた。ガラスの破片は不思議と僕には当たらなかつたようだつた。

目を開けると、部屋中に散乱しているはずなのガラス片はひとつも落ちておらず、窓ガラスも元通りになつていた。

「やつと来たか口ボット鳥

鳥人の方を見ると、その肩にはいかにも「口ボット」という感じのオウムが乗つていた。

## 第一話「鳥人の秘密」（後書き）

<次回予告>

突然現れた「ロボット鳥」<sup>ちよう</sup>とは…？

次回「超高性能メカ、ロボット鳥」

乞つゝ期待！

## 第三話「超高性能メカ、ロボット鳥」

第三話「超高性能メカ、ロボット鳥」

「な、何が起こったの！？」

「はは、驚くのも無理はない。今ロボット鳥がガラスを突き破つて中に入り、そして即座に破片を回収して処分し、新しいガラスを張りなおし、その隙に私が君の宿題をやっておいたのだから」

「ほんとに！？」

僕は真っ先に宿題を確認するため、机まで駆け寄った。今週の宿題はとても多くて困っていたのだ。

すると鳥人はそれを阻んだ。

「いや、すまない、そつちは冗談だ。そこは普通ガラスのほうを先に確認するべきじゃないかね？」

僕は無言で睨んだ。

鳥人は咳払いをした。

「まあいい。とにかくロボット鳥は高性能なんだ」

確かにガラスは新品に換わっていた。どうやったかはわからないが、とにかくロボット鳥はものすごく性能が良いようだ。

僕はいかにもロボットらしい外観のオウムであるロボット鳥に話しかけてみた。

「君、すごいんだね」

「……」

「ガラス、どうやって用意したの？」

「……」

返事はない。かわりに鳥人が答えた。

「話しかけてもロボット鳥はしゃべったりしないよ

「そうなの？ 高性能なのに」

「いや、高性能が故にだ」

鳥人の言つことはよくわからなかつた。外觀がオウムなので話しかければそのうちしゃべれるようになる気がした。

「君、本当にしゃべらないの？」

「……」

「高性能なのに？」

「……」

「オウムなのに？」

「……貴様とはしゃべらぬと言われただるつー 愚かな人間よ…」

「うわあ、しゃべつた！」

しかも口調がやけに威圧的だ。

「しゃべらないんじゃないの？」

「ロボット鳥がしゃべらないのは性格的な問題だ。今の彼の発言に氣分を害したのなら私が謝る」

そう言つて鳥人は膝をついて謝るとしたので慌てて止めた。

「いやいいんだよ気にしてないよ」

「そうか、ならいいが……ロボット鳥は高性能すぎてプライドが高く、そのせいで君のような低俗な人間とはしゃべる気も起こらないんだ」

「あなたの発言が一番ひどいよ」

「おつとこれはすまない……なら」

鳥人は膝をついた。……そして靴紐を結びなおした。

「謝るんじゃないのかよ！」

「え？ 何が？」

「ていうか人の部屋で土足かよ！」

「当然だよ君。鳥人界隈では土足で家に上がる奴も何人かいるんだ」「ほんдинないじやん！ それより鳥人界隈とか言つてるけど普通の会社員でしょ鳥さんは！」

「ああ、君のお父さんと同じトヨペットに勤めてる」

「一体この人に社会人が勤まるのだろうか。

「どうせ他の社員に迷惑をかけたりしてるんでしょ」

「そんなことはないぞ。私は売り上げナンバーワンの社員だ」

「鳥さんがー?」

「むしろ君のお父さんを含む他の社員が私の足を引っ張つてこるとも言えるね」

なんだが鳥人が言うと滅茶苦茶腹が立つ。

「でもイマイチ信用できないなー」

僕は素直に不審を露わにした。

「ふん。ならいひと言えばすぐに君は信用するだひつ」

「何ぞ」

「仕事は全部ロボット鳥に任せっこりー！ 私は仕事をしていいないツ！」

「最低だ！」

でも確かにロボット鳥なら何でも出来そうだ。

「じゃあ鳥さんは何をしてるの？」

「やうだな、それは非常に答えづらい質問だな……」

こんな化け物のことだ、本当はきっと特殊な仕事をしてこるのは。もしかしたらあまり公に出来ない仕事かもしれない。「これといって何をしてるといつ詰じやないが、まあ、だいたい家で2ちゃんどこ動だな

「最低以下だよ！ 何もしないにならひめて出社ぐらこしようよー！」

「着てく服がない」

「一にての言い訳かよー それこそロボット鳥に買わせなよー 売り上げ一番ならお金もあるでしょ？」

「服があつても接客なんて無理だね。人に会つの怖いー」

「あんたの方が怖いよー」

こんな駄目人間だとこのロボット鳥に稼がせてお父さんより給料をもらっているとは……。

小学生の僕でも世の中の不平等さを実感せざるを得ない。

「じばりぐれちで暮らすってことは、明日から僕が学校に行つてゐる

あいだ鳥さんはうちで遊んでるの？」「いや、それはない。ちゃんと外に出るよ

「あてはあるの？」

「ああ大丈夫。さつき口ボット鳥が手続きを済ませてきた」「手続き？ 大学でも行くの？」

「ふむ、君は勘がいいな。確かに学校だ

……まさか！

「明日から君のクラスに転入することになった」

「最悪だ！」

「安心したまえ。無理言って席は君の隣にでもらった

「やめてよ！ せっかく裕子ちゃんの隣だったのに…」「…」

「裕子ちゃん？ ほほう、君の好きな子か。どれ、私がとり持つてやろうつ、鳥だけに。」「とり」、持つてや

「ボケを二回言わなくともいいし、取り持つ必要もないよ…」

「そうか、なら私は自己紹介の練習をしなくては……。『人間の体に鳥の頭、鳥人だよ……』いや、やっぱり『やあ鳥人だよ、』から入ったほうがいいかな？」

「どっちでもいいよ！」

ああなんということだ。予想を遥かに上回る非常事態だ。

甘かつた。僕が甘かつた。この鳥人はとことん僕の日常を破壊していく。

はあ、明日学校行きたくない……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6358m/>

---

鳥人 -とりじん-

2010年10月8日13時39分発行